

○令和6年度大学運営協議会（R6.9.25）主なご意見への対応状況

	委員意見	現在の対応状況
1	<p>教学マネジメントについて</p> <p>前回の認証評価機関からの審査の指摘（H31.3）を受け、教学マネジメントはどのような感じで進んでいるのですか。</p> <p>教学マネジメントからいうと、大学のポリシーに従って実行していく組織が必要ではないでしょうか。通常、教務担当の副学長がいて、学長から教務担当の副学長に、教学マネジメントの体制づくりだとか、中身をおろしていく。いきなり教授会から教務委員会に行っても、実際、あまりにも現実を見ているので、そんなことを言ったらと、なかなか変えようとしません。変わっていくためにはトップダウンの組織が必要ではないでしょうか。</p>	<p>教学マネジメントについては、2024年1月に、評価委員会が中心となり「委員会活動等も含めた内部質保証の全体像について」「教学マネジメントにフォーカスした内部質保証の全体像」「教学マネジメントに係る指針」「アセスメント指針」を策定し、各委員会等で取り組んでいるところです。</p> <p>しかし、今年度の認証評価の「各組織の位置付けや所掌事項・各組織間の関係性の明確化、手順・手法を含めた進行管理を整理するなど、学長を責任者とした内部質保証の充実が望まれる」との指摘を踏まえ、教学マネジメントの円滑化や、教育の質等の向上を目指し、各委員会や組織の役割やつながりについて検討を行う予定です。</p>
2	<p>組織について</p> <p>組織図がありますが、学長から見たライン業務と、学長のスタッフとして大学としてやっていかなければならない業務が組織図からは読み取れません。すべて学長一人が、大学がやるべきことを下ろしている感じです。教育は、学長から看護学部の学部長に行き、部下の教員にすべきことが流れていく、何をやるのかというのは、下から上がってくるのではなくて、大学が決めて指示するものです。</p>	<p>今年度の認証評価においても、学長が委員会等で議長を務めていることなど、学長と教授会や委員会との役割分担等について意見をいただいております。小規模な大学である本学にあった体制等の検討を進める予定です。</p>
3	<p>授業評価アンケートについて</p> <p>授業評価アンケートの回収率が低いのは、学生にとってアンケートをすることのメリットが学生にちゃんと伝わっているのかということだと思います。「またか」とか「適当につけておけばいいんだ」というように学生が思うようでは、意味がないのではないのでしょうか。このアンケートに回答することによって授業が改善されていきますと、学生の皆さんにとってプラスになります。そのためには、質問項目も学生目線に立ち、学生がこういうことについて回答したいという内容にしていかなければならないのではないのでしょうか。教員にとっては、ともすると「先生が批判されているのではないか」というようにマイナスに作用することもあります。これはあくまでも「学生にとってよくなることだから皆でやりましょう。」というようにしていかなければならないのではないのでしょうか。</p>	<p>評価委員会で回答率を増やすための手立てを議論し、各教員に、各科目の最終授業時間を10分早めに終了し、学生に授業評価アンケートのQRコード及びURLを提示したうえで、教員は退出し、学生が自由意思で授業評価アンケートを行うことができる対応をとるよう依頼をしています。また、Wi-Fiや、学修支援システムの整備により回答率が上がる方策を考えていきたいと考えています。</p>

		委員意見	現在の対応状況
4	中期計画について	<p>中期計画がありますが、一般教員からすると全く見えてこない、これは私の問題ではありません、誰か担当の人がやるのですよねとになってしまうのではないのでしょうか。それぞれの目標がそれぞれの先生のところまで落ちていかないといけないと思います。ある意味先生方は、これは事務方がまとめればいいのか、というふうになりかねない。</p> <p>また、数値目標は必要で、例えば、研究を強化するとする、発表論文を年にいくつかと目標を決めようとする、あるいは外部資金はこのくらい獲得しましょう、と数値目標を決めると、1人当たり先生がどのくらい寄与しなければならないかということになる。そのほか、教員に具体的に関係する項目はたくさんあります。</p>	<p>各委員会等の自己点検・評価で、各年度の計画作成時に中期計画との照合を行ったり、教員のFD研修などを行い、中期計画の教員への浸透を図っていくこととしています。</p> <p>数値目標については、今後の検討課題です。</p>
5	教育の今後の方向性	<p>地域医療と高度看護実践、そういったところに力を入れている方向性はこれからも続けてほしいと思っています。</p>	<p>地域の看護の質の向上に資する役割からも、大学院における専門看護師教育や、認定看護師教育課程若しくは特定行為研修、現任教育を継続していきたいと考えており、受講者を増やす手立てを検討しているところです。</p>
6	発信について	<p>看護大学の存在と役割、進めようとしている看護について、メディアを介して発信してもいいのではないかと感じています。例えば地方紙とか地域紙とかそういうところで特集を企画してもらい定期的に発信していくのはどうかと思います。</p>	<p>令和7年9月から地方紙（長野日報）に月1回、本学の教員の健康や病気の予防などに関わるエッセーを掲載しています。（参考資料添付）</p>
7	看護実践国際研究センターの名称	<p>看護実践国際研究センターの名称について、国際という言葉は、以前はアジアとかあるいは太平洋の島国を視野に活動されていたことによるのでしょうか、少しずつ地域に視点がシフトしてきているように思います。地域医療の看護学を大切にされているところから、この名称を見ると少し違和感があります。ただ、国際的視野もちろん必要なことなので、その意味では国際という言葉も捨てがたく思います。名称は今後の検討課題でしょうか。</p>	<p>看護実践国際研究センター運営委員会で、名称や愛称について検討しましたが、良案がない状況です。</p>
8	パンデミック時の実習について	<p>新型コロナの影響で、実習にどんどん来られる時期がなかったというこの4年間で、すごく影響があるなど実感しています。新型コロナも今後あるかどうかわかりませんが、極力実習を止めずにできたらよいと思っています。</p> <p>実習に来ていただいて学んでいただくことにより、人に慣れるとか、連携とか、乗り越えて働き続ける心の強さが培われていくといいなと思っています。</p>	<p>臨地実習の果たす役割や効果は、学生の学びにとって大変大きなことから、新型コロナ等の感染がある中でも、臨地実習は継続できるよう、病院等の実習施設と方策を検討してまいりたいと考えております。</p>
9	学生の心理面のサポート	<p>看護大学だと、学生は絞って将来を見ているから、「そこにいけるだろうか」と思った瞬間に、すごい悩みだと、一般的な学校（学部）だとこちらが駄目だったらこっちもあるといくらでも変えられますけど、看護大学は看護だけを目指しているのだから、学生の心理面のサポートをしっかりやらなければならないのだと思います。</p>	<p>学生への相談対応は、学年顧問、保健室、学生支援員等が連携し支援体制を組んで行っています。</p> <p>進路変更を希望し退学する学生も年に数人おります。</p>

		委員意見	現在の対応状況
10	DX化	<p>学生側の視点から感じますことは、教学DXが急激に進んできているということもありまして、これから一括してポータルサイトで見えるようにして、紐づけしたデータによる、エンロールマネジメント（志願—合格—入学—在学—卒業—同窓までを一貫してサポートすること）、入学から卒業まで、学生の個々の成長過程の可視化ができることも、学生の学びの成長の証というか、学修の質を上げるという意味では課題かなと思っているところでございます</p>	<p>DX化については、今年度末までにはWi-Fiの設置、学修支援システム（ポータルサイト）の導入が完了する予定です。これらのシステムを有効に活用したり、電子教科書の利用や学生の成長の可視化を図る方策等、引き続き必要なDX化に取り組みたいと考えております。</p>